

私の富士登山

渡邊 美知夫

私が山梨大学に赴任したのは戦後間もなくの、昭和二十三年三月のことでした。私は新学年が始まった最初のクラスで、三十人ぐらい居たと思われた学生達に、

「君たちは甲府又は山梨県下、或は周辺の学校の出身だと思うが、大半は既に一度は富士山に登ったことがあるのではないかと聞いてみました。

私は大阪と神戸の中間に聳える、六甲山という山脈の麓の私立の学校で、中等教育と高等学校教育を受けたものですが、その学校の校舎は岡本という、万葉集にも名が出ているという、有名な梅林の近くにあって、昼休みに一走り、名物の鶯餅うぐいすを食べに行ったりもしたのですが、背後に聳える六甲山という、思いの外に深い山には幾つもの登山ルートがあり、学校の授業の一環として、或は個人的に、そのいずれをも悉く試み済みでした。そうした経験から、若い者は山があれば登るものと、なんとなく思いこんでいたものです。

ところが私の質問に対する答えは完全に予想外のものでした。つまり誰一人富士山にはまだ登ったことがないというのです。戦時中は山どころではなかったのかなと、私は改めて深刻な思いをしました。

そんなことがあったせいもあって、私はその年の夏休みに、早速富士登山を試みることにしたのですが、私の癖で誰一人ほかの人を誘った覚えはありません。ところが山麓まで運んでくれるという車の乗場へ行ってみると、なんと二十数名の「本学」の学生が集まっているではありませんか。女子学生も数人目につきました。

総勢ひと固まりに詰め込まれたのは大型のトラックでした。一同立ったままでギッシリ積みこまれて、トラックは勢いよく走り出しました。その当時は国も地方も、道路の整備なんぞする余裕はとてなかつたのでしょう。トラックが走り出すや否や猛然と砂埃りが舞い上がり、一同埃りだらけになりました。トラックがどんなコースをひた走って、山の麓ふもとに往きつ

いたものか、今となってはサッパリ判りませんが、要するに今日のように、上等の車で五合目まで、などという結構なことは、夢にも思い付かぬ時代でした。

私共は思い思いに登り始めました。高度が増すにつれて植物の相が変り、樹相が移ってゆくのが興味深く眺められました。やがて草木が絶えて石炭ガラのような荒地になって行きました。

フト気がつくと、すぐうしろに女子学生が一人追いついて来ていました。しばらく二人は無言のまま、並んでいましたが、そのうちに後から、富士講とでも云うのでしょうか、白装束の一群の声が聞こえて来ました。私共より慣れた、力強い足取りです。忽ち私共両人は彼等に追い越されました。そこで私はそばの彼女に「あの人達のことをどう思う」と訊いてみました。彼女の答えはなんと、「お気の毒に思います」だったのです。私は何とも返す言葉に窮しました。漢字で書くと「六根清浄」とでもなるのでしょうか、私には子供の頃から聞き慣れたことばで、従って私には懐かしい印象しかないのにと、私はまたもやほろ苦い思いをさせられざるを得ませんでした。

懸命に歩を進めるのに意識が集中するようになり、フト気が付くと、私は一行のかなり前方に独りぼっちになっていました。七合目あたりに着いた時です。男子学生の一人が下の方から息せき切って追っかけて来て、女子学生の一人が高山病になっらしいと云うのです。誰かが背負って降りるより仕様がないうことになったのですが、並居る男子学生の誰一人吾こそはと進み出る者が現われません。同じ齡頃の娘さんを、背負って引き返すより外ないことになったわけですが、誰一人我こそと申し出る者がなのです。とに角高山の途中でグズグズしている訳には行きません。結局仕方なく私が高山病に喘ぐ患者を背負って引返すより仕様がないことになってしまいました。負う者も負われる者も無言のまま下山を始めました。四合目を過ぎた辺りまで降りて来たところで、背中の娘さんが口を利き、

「この辺で結構です」とつぶやきました。症状が落ち付いたのでしょう。

私にしても「千載一遇」とも云うべきこの機会に、このまま山を降りてしまうのは残念だなと焦りだしてもいたところでした。私は漸く娘さんを背から降ろし、

「では呉々も気をつけて」と言い残して、あとは遮二無二元来た山道を引返しました。日が暮れてきて、疲れも尋常ではありませんでしたので、八合目の宿に泊まって、翌朝の「御来光」をとっくり拝みたい一心でした。

私は八合目の宿に泊って夜明けを待つことにし、路傍の宿に跳びこんでへトへトの軀からだを休めにかかり、ホッと一息つきました。

それから三、四十分も経った頃でしょうか、男子学生の一団が、私を宿から引張り出しに來たのです。私は仕方なく宿を出て、歩き出しました。数分毎に立ち停まって休まなければならないような状態でした。頂上はもう直ぐだと、わが身を励ますのですが、軀からだがいうことを聞きません。一步前進してはバツたり、二歩よろめいては又バツたり、外聞も見得もあつたものではありません。五体倒地ごたいだいちということがあつたようですが、私は無意識にその行ぎょうを繰返して、恥も外聞もなく、やっとの思いで、それでも遂に頂上に辿り着くことができました。

私は朦朧もうろうとした状態ながら、兎に角御來光も拝みました。お鉢まわりも楽しみました。

富士山は二度とお断りだなと思ひながら、私は定石通り須走りを駈け降りてその日のうちに我家に帰り着きました。行を共にした学生達からは何の便りもなく打過ぎてしまいました。

現在私は有名な「深大寺」から程遠からぬ処に住んでいますが、私がデスクを据えている二階の窓から、天気さえ良ければ秀麗な富士の姿を遠望することが出来ます。富士見西行ではありませんが、富士は西行流が良いのかもしれないと思ひています。

(2005. 1. 8)